

清河八郎 「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

2

清河八郎の旅日記「西遊草」によると、八郎が母の亀代を伊勢参りに連れて行くため生家のあった庄内町清川を旅立ったのは1855（安政2）年の旧暦3月20日。新暦では5月6日に当たる。亀代は実家のある鶴岡へ前日出発した。

八郎は清川の酒造家斎藤家の長男。広大な田畑、山林を所有する裕福な家だったが、数え年18歳の時に家出して江戸で学問と剣の修業に励み、同25歳で神田二河町に塾を開いた。

ところが、この塾は火災に遭ってあっけなく焼けてしまい、今後の身の振り方を相談するため帰郷した。そこで父



昔人の健脚ぶり実感

田んぼ道3時間

豪寿（ひでとし）と相談し、長い間心配をかけた母を伴って伊勢参りの旅に出ることを思い立ったらしい。

清川を出た八郎は、庄内町田谷に向かった。「西遊草」に「田谷村をすぎ、渡部氏の家に休み、一杯の酒を傾ける」とある。ちょうど渡部家の主人が斎藤家に滞在しており、八郎の旅立ちに同行して帰宅した。

清川から鶴岡に出るルートは、通常なら庄内町東興屋、狩川、千本杉、鶴岡市藤島などを經由する清川街道（江戸街道）を通っていたが、渡部家に立ち寄るため遠回りになる田谷への道を進んだようだ。

東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表）戸沢村出身の踏査隊は、八郎がたどったのに近い道を確認するため、清川から集落伝いに歩いて田谷を目指した。

道を進み、廻館を経て田谷へ。日差しが強く、汗だくになりながら約14キロを3時間かけて歩いた。踏査に加わった鶴岡市湯田川、旅館業庄司庸平さん（33）は「昔の人の健脚ぶりであらためて実感した」。

八郎に同行した「渡部家の主人」とはどんな人物だったのか。岩波文庫版「西遊草」の校注には、渡部作左衛門という田谷村の富農で斎藤家の親類とある。

田谷に着いた踏査隊が農業若松功雄さん（73）方を訪ねると、1771（明和8）年に作左衛門家が松山街道に架けた石橋の石が残っていた。若松さん方は渡部家のうまやがあった場所だという。「今は畑などになってるが、うちの周りは昔は広い渡部家の屋敷だった」と若松さん。

渡部家は代々作左衛門を襲名していた。地元の歴史に詳しい田谷の渡部哲夫さん（88）によると、初代作左衛門は藩

主酒井氏が庄内へ入部したころ大阪から田谷に移り、子孫が地主として勢力を拡大していった。1813（文化10）年ころには羽黒山に1万本の杉苗を奉納し、「田谷杉」と呼ばれる美林に育った。

「西遊草」で八郎が渡部家を訪れた翌1856（安政3）年、渡部家は庄内地方の長者番付「鶴亀松宝来見立」で小結に昇進した。哲夫さんは「作左衛門は手広く商売をして斎藤家とも交流があり、江戸への行き来などで清川に立ち寄ることが多かったのだろう」と話す。

その後、明治に入ると酒田新井田倉庫の払い下げを受け、倉庫業で巨万の富を得た。明治天皇行幸の際は行在所（あんざいしよ）の指定を受けたが、国のデフレ政策や膨大な出費などで没落したという。

「西遊草」には、八郎が田谷から鶴岡に向かった道は書かれていない。江戸時代に田谷から鶴岡へ行くには松山街道で八色木を通り、藤島で清川街道に出た。清河八郎もそこを通ったに違いない」と哲夫さんに教えてもらい、そのルートを進むことにした。



明和年間に渡部作左衛門家が架けた橋に使ったという石を確認する踏査隊

庄内町田谷

（文）鶴岡支社・伊藤哲哉、写真）同・色摩幸幸